

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれ話を掲載します。

電車に乗っている。七人がけの座席に、五人か六人くらいで、デンと腰かけ、股を広げている。

新聞か本（マンガ）に読みふけっている。居眠り（またはそのふり）をしている。その前に人が来て、そわそわと立っている。〈そこを、もう少し詰めてくれないかな〉というように眼が動いている。しかし坐っている連中は、知らん顔。傲然と、ふんぞり返っている。その半分以上は若い人たちだ。

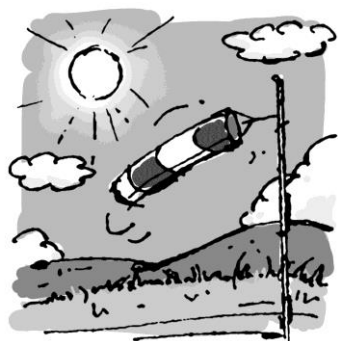
前の座席でその様子を見ていた初老の紳士が二人、次の駅で降りる時、歩きながら会話していた。

「大国日本も、危ういな。エゴやぼんやりが多くなった。人の気持ちをもっと考えなくちゃね」

「わたしも同感だ。日本人は気づかないままに、いい気になりすぎているよ。恐ろしいことだ」

さて、ここで言いたいのは、人間は乗り物に乗っている時も、その正体を現わすということだ。全部とはいえないにしても、少なくともその一部は、自然に現われている。

電車に乗っていても、見る人は見ている。一ぺんの挨拶にも、一碗の飯の食い方にも、電話の応対一つにも、何にでもその人の状態は出てくる。



5月のテーマ | 今日の外に人生はない

今の「ひとつ」が大切だ

今の、このこの、このひとつ以外には人生はない。たくさんは、ひとつの集まりだ。だから一生涯といっても今の積み重なり以外のなものでもない。

「今やっている、その一つひとつに全力を込めよ」などと言うと、いかにも堅苦しいようだが、それは「今やっていることを粗末にするな」という意味である。今日のことを粗末にやっていると、明日のことも粗末になる。そして、やがて一生のことが粗末になってしまうのだ。

はじめに挙げた乗りものの例に執着するようだが、自分だけが楽をして坐っているというのは、自分のエゴの表明に他ならない。自分の利を守ることでは自分を大切にしているようだが、人生は昔から言われているように何といっても共存共栄である。一方的な、自分だけの我利我利では必ず衰えるし、滅びる。自分だけ坐っていて、前の人をさせようとしてもしなない姿勢態度はやがてマイナスを招く。うっかりしていて気のつかない時もあるが、そのときはすぐ「さあ、どうぞ」と譲る態度にかえよ。それが「当たり前」ではないか。

その「当たり前」ができない、気もつかないというのは「今のひとつ」を粗末にしていることだ。何でもないことのようにだが、そうした一面は、他の面にも大きく影響してくる。家庭や職場にも、さまざまな影を落とす。そしてこうした影が、広く民族の、そして地球の人類生活にも及ぶようになる。

『今の「ひとつ」が大切だ』より